事業でありまして、此事ばかりは天然の法則を以ては律し難い事であると思ひます、世に基督教の「感化力」を說く者が多くありますが、然し「感化力」は外部の感化に止まります、如何に善良なる家庭でも學校でも其感化力は靈魂の中心にまでは到着きません、聖樂と聖式と聖語との中に浸されて居てもキリストを解からない者は終に解かりません、神は人類に善を爲すの自由を與へ給ひしも靈魂を活かすの一事は之を御自身の手に保留し置き給ひしと思はれます、爾うして其事の實證は神に救はれた者の實驗であります。

御覽なさい、基督教の歷史を、キリスト御自身が境遇の子ではありませんでした、「ナザレより何の善き者いでん乎」とは其當時の諺でありしにも關はらず、キリストは此ナザレより出て學者パリサイの人に代つて、神の選民の敎導者と成つたではありません乎、又キリストより直接に敎を受けし十二弟子の在りしにも關はらず、彼を最も廣く且つ深く世界に紹介した者はペテロ、ヤコブ、ヨハネと言はんよりは寧ろタルソのパウロと言ふべきではありません乎、羅馬天主敎會に多くの高識なる神學博士の在りしにも關はら

ず、福音を其初代の純潔に歸へらしめし者は礦夫の子なりしマルチンルーテルではありません乎、英國の端から端まで逐はれ、敎を演ぶる爲めの一の高壇さへも有たざりしジョン、ウエスレーが近世の宗敎的新紀元を開いた者ではありませんか、之に由て之を觀ますれば神は常に敎會を賤め、神學校を輕蔑め給ふではありません乎、ヒレル、ガマリエルの神學を排してガリラヤ湖畔に無智の漁夫を起して世界を敎化せしめ、アンセルム、アクイナスの半希臘的神學を斥けて礦夫の子に單純なる罪の赦しの福音を唱へしめ給ひました、爾うして此事は過去の歷史にのみ限りません、今日でも其通りであります、最も純粹なる基督敎が神學校から出て來る乎と思ふと決して爾うではありません、西洋に於てはムーディーのやうな、ヘンリー、ドラモンドのやうな神學者でもなく、牧師でもない者が最も善くキリストの心を知りたる者として顯はれて、神學者千萬人集るも、成し難き宗敎的の事業を爲しました、神學校の中に大切に育てられ、宣敎師に可愛がられて、此人こそは第二のルーテルならんと望を囑せられし人は、敎職を去り、次に宗敎を棄て、終にはキリストの聖名までを嘲ける者と成りしに代へて、神學校などへは一度も足

を蹈み入れし事なく、宣教師などよりは一顧の愛をも受けしことなき「粗野の人」が返て福音の大宣傳者となり、教會に由らず、教職を授からずして、神と偕に其恩惠の福音を熱心に説く者となるではありません乎、實に基督教の歴史は教法師、神學者、職業的傳道師に取ては常に失望の歴史でありました、彼等の事業は常に門外漢の取て代はる所となりました、彼等は神の事業を人の手に取て、之を機械的に、又は組織的に繼續せんと試みて、常に神の敗る所となりました、靈魂復活の事業は到底人間の事業ではありません。

斯の如くに、我れ自身の實驗に照らして見ましても、又他の人の實驗に就て考へて見ましても、又、基督教全躰の歴史より推して見ましても、靈魂救濟の事は、是れは天然以上、人力以上の事業であります、即ち神の特別の事業であります、是れは神が企て、神が成し遂げ給ふ事業であります、我等人間は此事の前に立てば只口を噤いて驚くのみであります、私共は勿論豫定の論理を充分に追究することは出來ません、然しながら茲に述べしやうな自他の實驗に由て、其決して據る所のない教義でないことを悟るのであります。

問、其御説明は面白く拜聽致しました、然しながら、若し此事が事實であると致しますならば茲に大疑問が起つて來ます、即ち若し神の豫定とか選擇とか云ふことが人類が救はれる、救はれないの原因でありますならば、人は己れの救濟に關しては如何することも出來ないこと、是れが第一であります、第二は、斯くも或者を救つて、或者を救はざる神は甚だ偏頗なる神でありまして、斯かる神を公平の神、公義の神と稱することは出來ない、是の事であります、是等の事に就て貴下は如何御説明になります乎。

答、御尤なる御質問であります、私は貴下の第二の御質問より答へませう。

其四　豫定の論理

答、豫定は神に取ての不公平なる所爲であるとの疑問は今の人に由て始めて唱へられたものではありません、是れは豫定説が始めて世に出た時に、其時に直に提出された疑問であります、豫定にして若し眞理なりとすれば神何ぞ尚ほ人を責むるや、誰か其旨に逆ふことを爲さんとはパウロが自身に問ふて自身に答へた質問であります、爾うして彼は之

に答へて曰ひました、

嗟人よ、爾何人なれば神に言ひ逆ふや、造られし者は造りし者に向つて、我を斯く造りしと云ふべけんや、陶人は同じ土塊を以て一つの器を貴く、一つの器を賤く造るの權あるに非ずや（羅馬書九章十九、廿、廿一節）

と、パウロの此答辯が滿足のものであるや、なきやは別問題としまして、神は不公平なりとの疑問は彼れパウロが豫定を唱ふるや否や、直に彼の心の中に湧いた疑問であつたこと丈けは彼の此問答に由ても明かであります。

然し豫定に就て「神は不公平なり」との疑問を出す人は未だ神の何たるかを知らない者であると思ひます、若し不公平を以て神を責めますならば同じやうに天然を責めなければなりません、天然は一目して非常に公平であるやうで實は非常に不公平であります、何故に獅子は林の王であつて山羊や、羚羊は其餌食とならねばならぬか、何故に或る婦人は美人として生れて、他の婦人は醜婦として生れて來た乎、生來何の罪ありて蛇は人に嫌はれて鳩は人に愛せられる乎、是を思へば天然の不公平も亦た甚だしいではありませんか、爾うして此疑問に對して我等はパウロの言葉に似たる言葉を以て己に答へ、若し己が不幸の地位に立つ者でありますならば其れを以て己を慰めんとするではありませんか乎、即ち「是れ吾人の知る所に非ず、吾人は天然は斯く爲せりと知るのみ、其他を識らず」と、神に對しても同じことであります、神が或人を貴き器として造り、他の人を賤き器として造りたればとて、吾人憐むべき人間は之に對して何んとも言ふことは出來ません、吾人は「神は斯く爲し給へり、其他を識らず」と云ふのみであります。

次に豫定に就て神の不公平を唱ふる人は豫定の歎ばしき半面のみを見て、辛らき困しき半面を見ない者であります、神に簡まれて天國に入ると云へば如何にも幸福のみであるやうに聞えますが、然し此幸福に伴ふ辛苦と申しましたならば是れ亦實に普通の人の想像以外であります、基督信徒の歡喜に伴ふ基督信徒の苦痛があります、二者共に世の知らない所でありまして、若し豫定に伴ふ苦痛のみを示されましたならば世の人は總て之に與からざらんことを望むに相違ありません、迫害、飢餓、裸程、他言ふに言はれぬ苦痛、教會よりは放逐され、父母兄弟よりは惡人として侮辱され、殆

んど睡ざされ、然れども擔ふべきの義務は總て擔はせられ、國人よりは國賊として斥けられ、友人には僞善者として敵に付され、然かも之に對して一言の怨恨を述べることは出來ず、只羔の如くに忍ばなければなりません、其屈辱、其悲痛、到底常人の忍び得る所ではありません、然しながら是れ亦確かに豫定の半分であります、吾等基督信徒は豫定に由て基督と共に榮に入るの特權のみならず、亦基督と共に十字架に上げられるの苦痛を授けられた者であります、爾うして苦痛は前きに來て榮光は後に來るものであります、爾うして實際に於て神に豫定された人は大なる不幸者として世に認められます、

我儕が見るべき美はしき容なく、美くしき貌はなく、我儕が慕ふべき艶色なし、彼は侮られて人に棄てられ、悲哀の人にして病患を知れり、亦、面を蔽ひて避くることをせらるゝ者の如く侮られたり、我儕も彼を貴まざりき（以賽亞書五十三章一、二、三節）

とは昔より今に至るまで神に豫定されたる者の特性でありました、即ち世は未だ曾て豫定された者を見て其人を羨んだことはありません、從つて彼を豫定した神の不公平を唱へたることもありません、否な、反て神に豫定されざることを以て大なる幸福と信じて居ります、或は大政府の補助を受けて居るとか、或は教會又は宣教師の人望を悉く身に浴びて、高德熱信を以て稱せられて居るとか云ひて、神に特別に簡まれて、政府と社會と教會とに蛇蝎の如くに嫌はれない事を以て、大に神に感謝して居ります、豫定は神の

針の山を越へて後の樂園であります、爾うして樂園に達するまでの苦痛の遠且つ大なるを知る者は、神が或人を豫定したればとて神をも恨まず、又其人をも羨みません。

爾うして實際に於て神に豫定された人は大なる不幸者として世に認められます、

我儕が見るべき美はしき容なく、美くしき貌はなく、我儕が慕ふべき艶色なし、彼は侮られて人に棄てられ、悲哀の人にして病患を知れり、亦、面を蔽ひて避くることをせらるゝ者の如く侮られたり、我儕も彼を貴まざりき（以賽亞書五十三章一、二、三節）

とは昔より今に至るまで神に豫定されたる者の特性でありました、即ち世は未だ曾て豫定された者を見て其人を羨んだことはありません、從つて彼を豫定した神の不公平を唱へたることもありません、否な、反て神に豫定されざることを以て大なる幸福と信じて居ります、或は大政府の補助を受けて居るとか、或は教會又は宣教師の人望を悉く身に浴びて、高德熱信を以て稱せられて居るとか云ひて、神に特別に簡まれて、政府と社會と教會とに蛇蝎の如くに嫌はれない事を以て、大に神に感謝して居ります、豫定は神の

不公平を示すとの言は理屈一片の言であつて、實際は決して人の口より出づる言ではありません。

問、其事は夫れて大分判分りました、然らば私の第一の疑問に就ては如何お答へになりますす乎、即ち若し豫定にして眞理なりとすれば、人は自己の救濟を求めても無益ではありません乎、亦他人の救濟を計るの動機も全く無くなつて仕舞ふてはありません乎。

答、貴下の其御質問は茲に有益なる問題を開きます、即ち豫定說と傳道との關係であります。

其五　豫定と傳道

問、御說の通りであります、私は若し豫定にして眞理なりとすれば傳道の必要は全く無くならふと思ひます、何故ならば神は彼が救はんと欲する者は人の手を藉らずとも如何かして必ず救ひ給ふに相違ないからであります。

答、左樣であります、若し基督教の傳道なるものが普通、世に謂ふ所の傳道なるものでありますならば、其れは豫定の信仰に由りて根から絕たれて仕舞ふに定つて居ります、然

しながら基督教の傳道とは世に謂ふ所の傳道ではありません、是れは我れ智者にして彼れ愚者なるが故に、我れ彼の蒙を開き呉れんと云ふやうな高ぶりたる考から來るものではありません、又、我れ救はれて彼れ墮落するが故に我れ彼を濟度し呉れんと云ふやうな高ぶりたる慈悲心より出るものでもありません、詮する所、基督教の傳道なる者は人を目的とする傳道ではありません、人を救はんとするのが基督教傳道の最大目的ではありません、私共は世の教師として傳道界に臨むのではありません、此點に於ては基督教の傳道と他の宗教の傳道との間に根本的の差異があります、爾うして此根本的の差異を認めずして幾人の基督教の傳道師が失望落膽に終つた乎、數知れないと思ひます。

問、是れは近頃にない奇態なことを伺ひます、基督教の傳道は人を教化せんとするのではないと仰せられるのでありますか。

答、爾うであります、實に爾うであります、其事を知るのが傳道成効の第一着であると信じます。

問、其事に就て充分の御說明を願ひます。

答、基督教の傳道は一つは表白であります、是れは「汝、罪を悔ひ改めよ」と云ふのではなくして、「我れ我が神の恩惠に由りて斯く成るを得たり、我は汝に此事を知らせんと欲す」と云ふ事であります、爾うして有力なる傳道とは常に斯かる傳道であります、パウロの傳道が斯かる傳道であつたことは彼が幾回となく彼の改信の實歴を彼の聽衆の前に述べたことが聖書に錄るしてあるので分かります、爾うして此事は亦彼の書翰が、訓誡的でなくして、自己發表的であるのでも能く分かります、基督教は理屈ではなくして實驗でありますから、是を宣べ傳ふるための最も有力なる方法は自己を標本として之を世に示すにあります、神學研究は如何に其蘊奥に達するとも基督教の傳道師を作りません、世に示すべき心靈的實驗の事實を有たない者は傳道師として世に出てはならないと思ひます。

基督教の傳道は第二に感謝の祭事であります、我等は世の罪惡を憤つて傳道界に出陣するのではありません、又其墮落を憐んで救濟の業に就くのでもありません、若し憐むべき者があれば、其れは罪人の首なる我れ自身であります、若し憤るべきものがあります

るならば、其れは我が裏にありて我を神より離さんとする我が罪であります、我等の傳道はキリストの愛に勵まされてゞあります、我等は沈默を守らんと欲して守り切れないからであります、我が如き罪人を救ひ給ふ神の恩惠を考へて、居ても起つても居られなくなるからであります、「嬰兒乳哺者の口に讃美を備へ給へる」神が我が口をも啓き給ふたからであります、是れは外側より社會の義務に强ひられて從事する傳道ではありません、心の奥底に働く神の愛に刺激せられて自發的に着手する事業であります、基督教の傳道は義務ではありません、特權であります、快樂であります、敵人の口調を藉りて云へば「道樂」であります、若し我れ福音を宣傳へずば實に禍なるかな（哥林多前書九章十六節）、是れパウロの言でありまして、總て言ひ盡されぬ歡喜を以て基督教の福音の宣傳に從事する者の聲であります、此歡喜がなく此歴へ切れぬ感謝がなくして基督教の傳道は必ず失敗であります。

斯く觀じ來つて豫定は傳道の妨害である所ではなく、反て傳道の精神であります、豫定は人に對してゞはなく神に對しての私共の義務の觀念を非常に高むる者であります、亦

た豫定は限りなき感謝の念を私共の心に起すものであります、「斯かる者をさへ救ひ給ふのみならず、我れ幾度か彼を捨てんとせしに彼は永遠の愛を以て我を愛せりとは是れ何事ぞ、斯かる無限の愛は我れ信ぜんと欲して信じ難し、然れども聖靈は我が心に耳語さて言ふ、是れ事實なりと、嗚呼我れ如何にして此恩に報ひんや」とは傳道心發動の原動力であります、爾うして斯かる愛に勵まされて、迫害も、飢餓も、裸程も、刀劍も何の懼るゝ所なきに至るのであります、總ての大なる傳道師に就て尋ねて御覽なさい、是れが彼等の傳道の精神であつたのであります。

世には人の愛國心に訴へて傳道心を起さんと努むる者があります、是れに多少の効力のあることは私も疑ひません、然しながらリビングストンは彼の愛國心に勵まされて、英國のために新領土を得んとて暗黑大陸に傳道に從事しませんでした、モレビヤ派の宣教師は愛國心に勵まされてグリンランドの氷山の中にエスキモー人種に福音を傳へませんでした、愛國心は强大なる勢力であります、然かし傳道の精神となすには足りません。

又、或人は社會改良の手段として傳道を奬勵致します、爾うして基督教傳道が社會改良のための第一等の勢力であることは何人も疑ひません、然しながら我等キリストを信ずる者は社會改良を目的として傳道に從事することは出來ません、社會は改まらふが、改まるまいが、其れ等の事は福音宣傳者の眼中には餘り重きをなしません、キリストの愛、永遠の愛を以て我を救ひ給ひし神の愛、是れが我等傳道者の心を支配する唯一の勢力であります、爾うして此愛に逐ひ立てられて我等は世の嘲笑も何も忘れて傳道に從事するのであります。

問、夫れは爾うと致しまして、救はれるもの、救はれない者が始めから定まつて居ると致しますれば傳道の張合ひが至て尠いではありませんか。

答、夫れは決して爾うではありません、私共豫定を信ずる者は信者を作くるために傳道は致しませんが、然かし信者を發見するためには熱心を以て之に從事致します、爾うして傳道は信者を作ることではなくして既に豫め作られたる信者を發見することであることは永く此聖業に從事した者の疑はない所であります、主は救はるべき者を日々教會に加へ

給へり（使徒行傳二章末節）、是れが傳道成功の徴候であります、キリストは亦た其弟子等に告げて、我れ爾曹の勞せざりし所を穫らせんとして爾曹を遣はすなり、他の人々勞せしに由り爾曹は其勞したる果を受くるなりと言はれました、此場合に於ては「他の人々」とは神を指して云ふのでありまして、我等傳道師は神の播き給ふた田に其熟いた時に收穫に行くばかりであるとのことであります（約翰傳四章三五—三八節參考）、爾うして此收穫の業に優さるの愉快なる業はありません、傳道師の謳ふ歌は農夫の秋の收穫歌であります、即ち「禾束を携へて喜び歸り來る」時の歌であります（詩篇百二十六篇六節）。

問、有難う仰います、大分基督教に就て新思想を懷くに至りました、勿論、未だ貴下の御説明に由て疑問が總べて解けたとは云へません、然しながら基督教を全く新方面より覗ふことを得て甚だ喜ばしく存じます。

答、私とても勿論、此簡單なるお話しに由て私が今日まで豫定のことに就いて考へたことを悉く貴下の前に述べ盡したとは申されません、私は殊に今日私が曾て非常に興味を以て研究しました、ヴァイスマン進化哲學と豫定説との關係に就てユックリと貴下に御話し申すことの出來ないのを甚だ殘念に思ひます、然しながら豫定は全然荒唐無稽のことではない、是れは基督信徒の深い經驗に基く教義であり、又、天然界に於て多くの比類を見ることの出來る眞理であること丈けを今日貴下の前に述ぶるを得て非常に愉快に存じます、願くは他日また座を改めて此深遠なる問題に就て再び御質問に應じたく存じます、サヨナラ。

羅馬書第九章自十至十三節

リベカ、一人即ち我儕の先祖イサクに由りて妊みし時、其兒輩は未だ生れず、從ひて善惡の事を爲さゞりし前に、神の豫じめ定めたまひし企圖は行爲によらず召したまふ者によりて堅うせられん爲に、兄は弟に事へんとリベカに謂はれたり、是れ我はヤコブを愛しエサウを憎めりと錄されしが如し（バプテスト教會出版新約聖書に據る）。

第七席

人類の墮落

宗教並に哲學上の大問題なり、而かも聖書は大膽に直白に此問題に斷案を下す、人類の墮落は其不完全にあらず、亦靈の理想に映ずる肉の粗雜に非ず、亦進化の途にある道德の程度に非ず、人情の存するあればとて人は罪人たるを失はず、嬰兒、亦、罪なき者にあらず、然らば人類は如何にして墮落せし乎、其墮落の源因如何、之を論理的に說明するは難し、然れども基督教は其實際的解釋を供す。

問、舊派の基督教では人類の墮落と云ふことを唱へるさうですが爾うであります乎。

答、舊派に限りません、基督教と云ふ基督教で人類を其良心の根底より救ひ得るものは必ず之を唱へます、大膽に、直白に人類の墮落を唱へ得ない基督教は微弱なる基督教であります。

問、人類の墮落とは短かく言へば何う云ふ事であります乎。

答、之を聖書の言葉を以て言ひますれば義人なし、一人も有るなし（羅馬書三章十節）、善を作す者なし、一人も有るなし（同十二節）、人は皆な既に罪を犯したれば神より榮を受るに足らず（同廿三節）、斯う云ふことであります。

問、其れは隨分過激なる言葉ではありません乎、且又深く考へて見ますれば人類を痛く侮辱したる言葉ではありません乎、世に惡人は多くして善人は尠いと云ふのではなくして、義人なし、善人なし、一人もあるなしと云ふのであります乎、是れ厭世の極であります乎、

答、爾うであります、若し人類の墮落が事實でありませんならば、是れは確かに過激の言であります、又斯く唱へる基督教は人類を侮辱する者でありませう、然しながら墮落が事實である以上は、是れは過言でも亦た侮辱でもありません、疾病を知て疾病と稱せざる醫師は不深切なる醫師であります、爾うして基督教は人類の最も善き醫師であります

から、彼は明狀に其墮落を唱へます、彼は又、此墮落を癒すに足るの充分の能力を有つて居りますから、之を唱ふるに關はらず、矢張り歡喜の宗敎であります。

問、人類の墮落が事實であるとならば止むを得ません、然しながら是れ果して事實であるか、其れが第一の問題であります、又、基督敎は果して斯かる事を敎へる宗敎であるか、其れが第二の問題であります、爾うして世に樂天家の多いのを見ましても、又基督敎全躰が希望歡喜の宗敎であることから考へて見ましても、人類の墮落と云ふが如きは是れ基督敎の何等かの誤解より來た敎義ではありませんか。

答、御尤なる御推察であります、人は誰でも己れの墮落を聞いて喜びません、隨て彼は容易に人類の墮落を信じません、然しながら信じ難い此事を信ぜしむるのが聖書であります、僞の宗敎は僞の豫言者と同じく常に淺く民の傷を醫し、平康からざるに平康、平康と云ふ者であります（耶利米亞記六章十四節）、人類墮落の敎義は確かに神の默示の一であります、神に依るにあらざれば我儕は我儕の墮落をさへ充分に知ることの出來ない者であります、爾うして我儕の全然的墮落を示されて我儕は始めて救濟の途に就くのであります。

問、私には如何も其事が能く判分りません、聖書は實に斯くも墮落したる者として人類を示して居ります乎。

答、居ります、人は脆い者、墓ない者であるのみならず、亦惡しき者であるとは聖書が其始より終に至るまで唱ふる所であります、人類の根本的墮落に就て聖書が示す所の言葉を今、一々貴下の前に陳べることは出來ませんが、然かし聖書全躰の精神から推して見まして、人性の墮落は其獨特の敎義の一つであることが判分ると思ひます。

問、先づ聖書の如何いふ所に人類の墮落が最も明かに示してあります乎。

答　詩篇第五十一篇にダビデの言として視よ我れ邪曲の中に生れ、罪にありて我が母、我を胎みたりと錄されてあります（五節）、是れ縱令詩人の言なりとは言へ、彼の深き實驗を示した者であります、人は如何なる者ぞ、如何にして潔からん、婦の產し者は如何なる者ぞ、如何にして義しからん、とは古人の諺としてイスラエル人の中に傳へられた言葉であります（約百記十五の十四）、預言者イザヤは神の前に立つて、自己の汚穢に堪へ得

ずして呼んで曰ひました、禍ひなるかな、我れ滅びなん、我は汚れたる唇の民の中に住みて穢れたる唇の者なるに我が眼、萬軍のエホバに在します王を視たりと（以賽亞書六章五節）、人の心は萬物よりも僞はる者にして甚だ惡し、誰か之を知るを得んやとは豫言者エレミヤの人生觀であります（耶利米亞記十七章九節）、主イエスの前に立てば「聖」ペテロでさへもイエスの足下に俯して主よ我を離り給へ我は罪人なりと曰はざるを得ませんでした、イエスは其弟子等を敎へらるゝに方ても爾曹惡しき者ながら云々と言はれまして、彼が選み給ひし十二弟子すら此「惡しきもの」の階級の外に立つ者ではないことを示されました（路可傳五章八節）、聖パウロは自己を指して罪人のうち我は首なりと曰ひました（提摩太前書一章十五節）、彼は又基督信者となりし前の彼の生涯に就て弟子テトスに書き贈つて、我儕も前には愚かなる者、順はざる者、迷へる者、諸般の慾と樂の奴隸と爲れる者、恨み妬みて日を送りし者、惡むべき者、又互に惡みあへる者なりし也と曰ひました（提多書三章三節）、斯の如くに聖書人物の中て聖と稱ばれ、預言者として崇められる〻者が、皆な悉く罪人であり、汚れたる唇の者であつたとのことでありますれば、

其他は推して知るべきであります、聖書は萬人を罪の下に拘幽めたり（加拉太書三章廿二節）とのパウロの言は聖書の充分に證明する所であります、義人なし一人も有るなし（羅馬書三章十節）、善を作す者なし、一人も有るなし（同十二節）、人は皆な既に罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず（同廿三節）、聖書に依りますれば義人、善人と稱すべき者は人類ありてより以來、唯一人ありしのみとのことであります、其人は義なるイエスキリストであります（約翰第一書二章一節）、其他は皆な惡しき者であります（路可傳五章八節）、蝮の裔であります（馬太傳十二章卅四節）、滅亡に備へられたる器であります（羅馬書九章廿二節）、世に生れながらにして神の榮を受くるに足る人ありとは聖書の何處にも示してありません、人若し新たに生れずば神の國を見ること能はず（約翰傳三章三節）とは總ての人に就て言はれた言葉であります。

問、或は御說の通りである乎も知れません、然しながら同じ聖書が亦、世に善人、義人のありしことを示して居るではありません乎、エノクは神と偕に歩めりとありまして、洪水前既に生來の義人のありしことを錄して居るではありません乎（創世記五章廿四

節)、又ノアは義人にして其世の完全き者なりきと書いてあるではありませんか乎(同六章九節)、殊にキリストが非常に小兒を愛し給ひしことに照らして見ましても人類の全然墮落說を聖書に由て維持するのは非常に困難ではありません乎。

答、爾うてはないと思ひます、エノクのことは記事が餘りに簡短で善く分かりません、然しノアが完全の人でなかつたことは創世記の他の記事で善く分かります、(九章廿節以下參照)、小兒の罪惡のことに就ては後でお話し致しませう、其他、聖書に其名を錄された人物の中で、聖い、玷なき人物とては一人もありません、「エホバの聖旨に適ひし王」と稱ばれしダビデは御承知の通りの大缺點の人でありました、其人となり溫柔なること世の中の諸の人に勝れりと錄るされたるモーゼも亦其憤怒の故を以て約束の地に入るの名譽を褫がれた者であります、天より降り來りしイエスキリストを除くの外は一人の理想的人物を認めない聖書は實に奇態な書ではありません乎、然しながら是れが聖書の聖書たる所以であります、若し聖書が何處かに其ソロモンなり、イザヤなりを指して、是れ完全無缺の理想的人物なりと錄して居りますならば、それこそ聖書が聖書でない最も善き證據

となります、然しながら神の聖書であります故に、斯かる矛盾の記事は其中の何處にも發見することは出來ません。

問、聖書の言葉は御指明の通りであると致しまして、夫れには其れ相應の說明がつくてはありませんか、爾うして其一は是れは神より見たる人生の狀態であると云ふことは出來ませんか乎、聖き神より人生を觀れば或は斯かる汚れたる者である乎も知れません、恰度私供人間の眼から見たる動物界の狀態のやうなものでありまして、神の眼から視たる人類は實に憐むべき愚かなる不完全なるものであるに相違ありません、現に先程、貴下が御引きになりました、約百記の言葉の直ぐ後にも

それ神は聖者にすら信を置き給はず、諸の天もその目の前には潔からざるなり、況んや罪を取ること水を飲むが如くする憎むべき穢れたる人をや(約百記十五章十五、十六節)、

と書いてありまして、神より觀たる人間の如何に卑しむべき者であるかゞ示してあるではありませんか乎。

答、其れは一理ある御説明であります、然しながら以て聖書の人生觀を説明し盡すものではないと思ひます、神は勿論我儕人間を神と同等の者とは見給ひません、父が其子を憫むが如くエホバは己を畏るゝ者を憫み給ふ（詩篇百三篇十三節）とは神が我儕に對して取らるゝ態度であります、神は我儕が土塊なることを忘れ給ひません、神の忿怒は我儕が弱き人間なるが故に我儕の上に宿るのではありません、神が我儕に就て恚り給ふのは我儕に何にか道德的の大缺點があるからであります、我儕は未だ曾て馬や犬の罪惡に就て怒つたことはありません、然かし神は我儕の罪惡に就て怒り給ふのであります、墮落は品性の墮落であります、力量の不足ではありません。

問、若し神の人生觀として視ることが出來ませんならば、之を靈なる人の人生觀と視ることは出來ません乎、御承知の通り人の靈には理想なるものがありまして、此の理想を以て見ますれば、彼れ自身が最も不完全なるものであります、肉は到底靈の理想に適ふものではありません、下等動物より徐々と進化し來りし人類が、自己を自己の理想に照して見ましたならば、自己は實に聖書に示してあるやうな不完全極まる者であるに相違ありません、基督教の謂ゆる人類の墮落なるものは、靈の眼に映ずる肉の狀態ではありません乎。

答、面白い御質問であります、多くの場合に於て、人類の罪惡なるものは其肉情として解せられました、パウロの曰ひしそは肉の慾は靈に逆らひ、靈の慾は肉に逆らひ、此の二つのもの互に相敵るとの言葉は斯かる意味に於て解釋されました（加拉太書五章十七節）、人間の罪惡といふ罪惡は其多分は肉慾に依て顯はれるものでありまする故に、終には肉慾其物が罪惡として認めらるゝに至りました、然しながら深く考へて見ますれば、肉慾是れ罪惡ではないことが分ります、食ふこと是れ罪惡ではありません、その飽食貪婪となるに及んで始めて罪惡となるのであります、飲むこと是れ罪惡ではありません、其醉酒放蕩となるに及んで始めて罪惡となるのであります、淫慾亦必ずしも罪惡ではありません、其汚穢、苟合となるに及んで、姦淫となりて罪惡となるのであります、若し肉慾其物が罪惡であるとならば、人生其物が罪惡であります、爾うして若し然かりとすれば罪より免かるゝの途は自殺より他にありません、然かし聖書は決して斯かる背理を唱へ

ません、基督教は何んであるとも、決して殺慾主義の宗教ではありません、家庭の神聖を貴び、感謝の生涯を勧むる基督教は、肉慾其物を以て罪惡とは認めません。

問、肉慾其物は罪惡でないと致しました所が、人には下等動物より讓り受けた多くの情性があるではありませんか、即ち獅子の如き兇猛、狼の如き貪慾、狐の如き奸智が彼にも遺傳性として存つて居るではありませんか、爾うして是れ皆な彼の靈性に逆うふものでありまして、彼の墮落なるものは實は此動物的遺傳性の存在を言ふに過ぎないのではありません乎。

答、斯かる情性の人にあることは能く分つて居ります、然しながら是れあるが故に彼は墮落して居ると云ふのではありません、人の心は善と惡との競爭場裡でありまして、墮落とは善が惡に負けたと云ふことであります、獅子の如き兇猛はありますが、然し人は羊の如く柔和なるべき者であります、狐の如き奸智はありますが、彼は詭計を弄せずして公明正大なるべき者であります、然るを彼は罪をして彼の主たらしめ、自ら好んで獅子の如くに又狐の如くになりました、彼は即ち服從すべき情性に征服されました、即ち

捕虜となすべき者に生擒られました、人類の墮落とは斯う云ふことであります。

問、然かし人は未だ尚ほ惡しき情性の征服の途に在る者ではありません乎、爾うして彼の進化と同時に惡は段々と其勢力を減じて、彼は終には其主人公となるべき者ではありません乎、然るを戰鬪中の彼を目して既に敗北した者のやうに見做しますのは彼に對して甚だ無慈悲なる措置ではありません乎。

答、實際爾うでありますか、人類は確かに神に依らずして、獨り自然的に惡を征服しつゝあります乎、私は貴下に豫め御承知置きを願ひます、惡とは無智のことではありません、惡とは申すまでもなく心の狀態でありまして、是れは知識の上達を以て除くことの出來るものではありません、爾うして人類に知識的の進化はある乎も知れませんが、然かし彼の靈性は、其れは進化の法則の外に立つ者のやうに思はれます、其最も明白なる證據は是を文明と道德との關係に於て見ることが出來ます、人類の歷史に於て藝術の最も旺なりし時は必しも道念の最も盛なる時ではありませんでした、否な、事實は是れとは正反對でありまして、罪惡が微妙精細を極めし時はイッても文明が其高度に達した時であ

りましたが、文學復興時代と云へば大抵は道心敗頽時代であります、希臘、羅馬の文學旺盛時代、歐洲の文藝再興時代、日本國明治の新文明輸入時代、是れ孰れも著しき道德敗頽の時代ではありませんか乎、今の人はよく道德の進化を說きますが、然かし彼等は未だ道德は實に進化すべきものであるか、無いかを深く究めません、道德は禮儀ではありません、又は習慣(獨逸語の Sitten)でもありません、是等には進化はありませう、然かし心の固有性なる道德には進化はありません、是れは改造さるべき者であります、進化する者ではありません、此事に就て豫言者エレミヤは申しました、

エテオピヤ人(黑人)その膚を變へ得る乎、豹その斑駁を化へ得る乎、若し之を爲し得ば惡に慣れたる汝等も善を爲し得べし(耶利米亞記十三章廿三節)

と、基督敎の謂ふ善なるものは、是れは惡が進化して終に善と成つたものではありません、又、人類が努力の結果、終に到達した終局點でもありません、基督敎で謂ふ善とは神の性であります、是れは人類が一度失つたものでありまして、神の特別の恩惠に由て其中の或る者が再び得たものであります、今の人の所謂る道德の進化なるものは、是れ

人類の歷史と吾人の實驗とが全然否定するものであると思ひます。

問、然しながら茲に更らに判分らない事は人類が皆な總て悉く墮落したと云ふことであります、若し是れが墮落でありますならば、人類の中に墮落しない者がある筈ではありませんか乎、然るに義人なし一人もあるなしと云ひますれば、是れ取りも直さず墮落なるものは天然性であると云ふのと同じでありまして、貴下の仰せらるゝ墮落なるものは是れ人類が自から選んで受けた災で無いことを示すではありませんか乎。

答、其れは强い御反駁であります、若し全般的なることが、天然的なることを證明しまするならば、御說の通り人類の墮落は之を其天然性と見做すより外はありますまい、隨て墮落は墮落たらざるに至りまして、人類は墮落を以て責められざるに至りますかも知れません、然しながら全般的なること必しも天然的なるとは限りません、全然無病息災の人とては廣き世界に一人もありませんが、然かし、完全なる健康は全然達し得られないものであると思ふ醫者は、是れ亦廣き世界に一人もありません、否な天然其物が決して完全のものではありません、故に或る物が天然的であればとて其物が完全であるとは

言へません、人の靈性には事物の標準とも稱すべきものがありまして、彼は萬物を測るに總て此尺度を以てします、完全の美人はありませんが、然かし彼は醜婦を美人なりとは稱へません、蛇は天然物ではありまするが、彼は蛇は鴿の如くに愛すべきものであるとは信じません、全世界に義人は一人もなくとも、彼は惡人を義人とは稱へません、縱し又詭辯を以て善惡の差別を塗抹せんとするも、彼の本性は欺くべからずして、彼は知らず識らずの中に善は之を善と呼び、惡は之を惡と呼ぶに至ります、如何して人類が悉く墮落したか、其れは非常に困難い問題であります、然しながら彼が墮落して居る事、其事實は誰も拒むことは出來ません、吾人の本性が其事を示します、人類の歷史が其事を證明します、爾うして聖書は神の權威を以て此事を吾人に告知らすものであります。

問、人類の不完全は之を認めると致しましても、之を墮落と稱するのは酷てはありませんか、殊に之を全然の墮落と言ひまするのは過酷ではありませんか、人は其完全を去りましたが、然かし未だ全然墮落は致しません、彼に今尙ほ善を追求するの心が存つて居ります、彼は又善を識別するの能力を失ひません、又その親子間の愛情に於て、

其朋友間の情誼に於て、其夫妻間の深情に於て、其愛國心に於て、其公義心に於て、彼は多くの美德を備へて居ります、人類の全然的墮落を唱へます者は其美的半面を觀過する者でありまして、斯かる者は萬物の長たる人間を侮辱する者と外、私には如何しても思はれません。

答、貴下の人情のための御熱心(Enthusiasm for Humanity)は感服の外ありません、人情は確かに天然の美性て有ます、亞拉比亞の預言者モハメットは其弟子に告げて曰ひました、「汝等に相憐むの心を與へ給ひし神に感謝せよ」と、『人情』、『相憐むの心』、是れあればこそ、此憂き世も少しは凌ぎ易いのであります、人情絶へて後は此世は眞の地極であります、然しながら少しく人情の何ものたる乎を究めて御覽なさい、其ドレ程深いものであつて、ドレほど賴みになるものである乎を探つて御覽なさい、先づ第一に、人情は人生の美事であるに相違ありませんが、然かし、是れは人類に限つたものではありません、是れを人情とは稱しますものゝ、是れ實は動物性てあります、子を愛するの情は馬にもあります、犬にもあります、雌雄相慕ふの情は禽にもあります、獸にもあります、同類相群り、相

援くるの本能は鹿にもあります、猿にもあります、勿論是等の情性が禽獸にもあるからとて、是れは貴くないとは言へません、然しながら人類に動物性が存づて居ればとて、夫れ故に彼は墮落して居らないとは言はれません、最も奸惡なる强盜は其妻子に向つては至つて優さしくあるとのことであります、他人を欺くに最も巧なる商人て其家人に向つては最も懇切なる者は澤山在ります、深き濃かなる人情は罪惡の毒勢を緩和するものなるに相違ありません、然しながら人情は亦多くの場合に於ては罪惡の被覆として用ひられます、壓制家が虐政を行ふのも民の人情に訴へてゞあります、不平家が民を煽動するのも其人情を刺激してゞあります、人情は貴いものであります、然し甚だ危險なるものであります、人情は道德の所在てはありません、是れは道德以外のものでありまして其支配を受くべきものであります、人の善惡を判別するに彼の人情の厚薄を以てする者は大に誤ります、獰人奸物は人情の甚だ厚い者であります、爾うして人情の厚薄を以て善惡の差別を立てる間は世は惡漢の詐術より免かるゝことは出來ません。

女子と小人とが讃美して措かざる人情なるものを深く其根底まで探つて見ますれば其何

んと頼なき、何んと薄弱なるものなるかゞ分かります、青年男女の戀愛の中には山をも鎔かすの熱心があるやうに思はれますが、然し其一朝、冷却する時に方つては、アルプス山頂の氷塊も之に優つて冷たくはありません、死をも約せる戀愛が瑣細の誤解の結果よりして嫉妬の刃に終つた例は數限りありません、戀愛は盲目であると云ひますが、盲目なるのみならず、亦片時的であります、菫花の放つ香と均しく、在るかと思へば消ゆる者であります、戀愛が爾うであります、愛國心も亦多く之と異なりません、其燃え立つや海をも煮、陸をも鎔かすかと疑はれます、詩歌は之に伴ひ、美術は其後に從ひます、其勵ます所となりては隋夫も勇者の死を遂げます、然かし斯くも貴き愛國心も其根元を究めて見ますれば、黨派心の一種たるに過ぎません、哲學者スペンサーは愛國心に定義を下して「私慾を國家大に爲せしもの」と言ひました、愛國心は戀愛と均しく盲目てあります、利益となることならば、罪惡も美德として之を迎へ、敵國の利益となるとならば美德も罪惡として之を斥けます、若し愛國心の標準を以て度りまするならば自國の滅亡を豫言

し歌まざりしエレミヤは義人ではありませんでした、愛國者の目より見たる使徒パウロは何の價値もない者でありました、世の多くの愛國家が光の主イエスキリストを嫌ひまするのも彼れキリストに此愛國の偏熱がないからであります、愛國心存在の故を以て人類の墮落を否む者は愛國心を其眞價以上に評價する者であります。

實に多くの場合に於ては人情其物が罪惡であります、理に依て歩まずして情に由て動き、確信に依て決せずして感情に依て定む、人情は勿論食慾飲慾以上の情性であるに相違ありません、然しながら人情は聖き靈性ではありません、人情は地より出しものであります、して、地に屬くものであります、人は墮落の底に在て尚ほ能く彼の人情を維持することが出來ます、少く共其幾部分を保存することが出來ます。

實に爾うであります、神を知らざる者の此世に於ける唯一の依頼は人情であります、是れが彼等を此世に繋ぐ唯一の繩であります、彼等は先輩の人情に頼んで其弟子とならんと欲します、彼等は上官の人情に頼んで官職に就かんと致します、妻い夫に於て頼る所は唯其人情であります、爾うして斯くも人情にのみ頼る彼等は甚だ嫉妬深き者であります、弟子たる者は師の唯一の弟子たらざれば滿足しません、臣たる者は君の寵愛を己が一身にのみ收めんとて凡ての手段を盡します、姑が媳を憎みますのは我が子の情愛を他の婦人に奪はれんことを妬んでであります、神を知らざる斯世は實に人情の奪ひあひであります、之を取りたりとて喜ぶ人、之を取られたればとて泣く人、憤る人、之を得て膠漆も啻ならざる情誼があるかと思へば、之を失つて怒髮冠を突くの憤怒があります、彼等は之を得んがために死し、之を失へば殺します、人情は疑ひもなく、世人唯一の寶であります。

然るに此人情たるや、決して鐵の如き、磐の如き堅き者ではありません、世人が見て以て人生の精華と做す此人情は砂漠の蜃氣樓よりも失せ易きものであります、是れは人生實在の外面を蔽ふ薄紗に過ぎません、觸はれば消ゆるとは實に此人情であります、故に東洋の厭世詩人は歌ふて曰ひました「行路難し、水にあらず、山にあらず、秖人情反覆の間に在り」と、人情にのみ頼て此世を渡らんとする者の憐れさは實に斯の通りであります、貴下は是れでも人情在るが故に人類は墮落しないと仰せられます乎。

問、去らば貴下は辜なき小兒も罪人であると仰せられるのであります乎。

答、爾うであります、嬰兒に罪の芽生のあることは其保育の任に當る者の誰でも知る所であります、生れたての赤兒でも、望むが儘に乳を與へられないとて怒ります、或る時は其不滿を表すために口に含まされし母の乳首を吐出します、彼は威嚇します、强請します、彼に罪がないのではありません、彼は未だ罪を犯すの能力を有ないのであります、彼の所謂る無邪氣なるものは、彼の無智と無能とに由るのであります、故に彼の智能の發達するに循ひ、彼は段々と罪を犯し始めます、狼の子は普通の狗仔と少しも違ひませんて、いとも可愛きものであります、然かし彼の生長するや彼は直に狼たるの特性を顯はして血を好むの獸となります、人の子も同じであります、其天使の如くに見ゆるのは其幼稚の時だけであります、彼の本性は惡であるのであります、只、其發揚の機會が與へられないまでのことであります。

斯く申しても私は小兒を愛さないと云ふのではありません、世に愛すべきものにして嬰兒の如きはありません、彼は力なき者であります、故に我儕は彼を憐みます、彼は既に惡

の萠芽を備へた者であります、然かし萠芽なるが故に之を摘み取るのは喬木を折るが如くに難くありません、彼には何やら罪に穢されざる前の原始の人に似た所があります、然かし斯かる愛らしき者なればとて罪なき者であるとは云へません、私は勿論古代の或る神學者に倣ふて「地獄の市街は赤兒の頭蓋骨を以て布き詰められて居る」とは言ひませんが、然しながら無辜の小兒であればとて、聖淨無垢の者であるとは言ひません、小兒罪惡說は多くの老婆的慈善家を顰かせます、然しながら此事を證明するものは基督教の聖書ばかりではありません、吾人の實驗も近世の心理學も此事を拒むことは出來ません。

問、然らば人は如何して墮落するに至りました乎、彼の母は罪にありて彼を孕みたりとのことでありますれば彼の墮落は彼れ一人が招いたものではないやうに思はれます、又、世に義人なし、一人も有るなしとありますれば、人といふ人にして誰れ一人として墮落に打勝つことの出來る者はないやうにも見えます、之に由て之を觀ますれば墮落は彼が避けんと欲して避くるとの出來ないことであります、然し墮落の事實はあると致しまするも、其故を以て人を責むるのは無慈悲ではありません乎。

答、御尤なる御質問であります、墮落の路筋を示さずして墮落を責めるのは無理を責めるやうに見えます、古代の神學は此難問題を解釋するに始祖アダムのエバの墮落の事蹟を以てしました、其說明に依りますれば人類は一致共同的の團躰であるから、一人の罪は之を全躰して負はなければならぬ、爾うしてアダムは人類の始祖であつて、其代表者であるから彼の罪は特別に人類の罪であつて人類總躰の負ふべきものであると、然しながら此說は一理あるやうに見えて而かも倫理學上甚だ不完全なるものであることは聖書の言葉に照らして見ても明かであります、エホバの神は豫言者エゼキエルを以て宣ひました、

夫れ凡ての靈魂は我に屬す、父の靈魂も子の靈魂も我に屬するなり、罪を犯せる靈魂は死ぬべし（以西結書十八章四節）。

罪を犯せる靈魂は死ぬべし、子は父の惡を負はず、父は子の惡を負はざるなり、義人の義はその人に歸し、惡人の惡は其人に歸すべし（同廿節）。

明白にして欺くべからざる此言葉に觸れて所謂る「アダム的原罪說」なるものは其土臺より崩れて仕舞ふと思ひます。

依て近世に到りまして、獨逸の有名なる神學者ジュリウス、ミュレル氏は彼の名著『基督教的罪惡論』に於て「前世存在說」Pre-existential theory なるものを提出するに至りました、此說に依りますれば、人は各、此世に生を有つ前に、或る他の所に於て生を有つた者である、爾うして彼は既に其所に於て罪を犯した者であつて、彼が此世に生れしは罪より救はるゝの機會を與へられんが爲めであるとのことであります、爾うして彼ミュレル氏は此說を維持するに方て多くの先哲の說を引かれし中に、殊に英國詩人ヲルヅヲスの前世的觀念を引照せられ、前世存在の決して架空の思想でないことを辯明されました、（此事に關して最も明晰にヲルヅヲスの思想を顯はしたものは彼の作 Ode on Immortality であります）、然しながらミュレル氏の此說には多くの有力なる反對がありまして、氏の『罪惡論』が基督教界近世の最大著述の中に算へられるに關はらず、此說丈けは未だ識者多數の中に快諾を發見するに至りません。

原罪說の說明は實に哲學上の最大問題であります、是を棄てることは最も容易くありますが、然しながら强健なる思想を以て世界第一と稱せられる詩人ブラウニングをして

I still, to suppose it true, for my part
See reasons and reasons; this, to begin;
'Tis the faith that launched point black her dart
At the head of a lie; taught Original Sin,
The Corruption of Man's Heart.

の一句を發せしめし此教義は容易に棄てられるものではありません、實に詩人の言の如くに心の腐敗を摘指せる原罪說は凡ての虛僞の首を毀つものであります、此說にして作れん乎、人類の强健なる道義的觀念は其樞軸を失ふに至りまして、人類の損失にして之に勝さるものはありません。

人類に罪戾(guilt)の自覺があります、是れは打消すべからざる事實であります、此自覺は何から來た乎、是れ彼が自身此世で犯した罪の結果が玆に出たものである乎、然かしながら彼は何故に生れながらにして罪人なる乎、ア、是れ深遠より深遠に響き渡る問題であります、私は白狀致します、私には此事は判明りません、玆に人生問題のスフインクスがあります、是を解かなければなりません、然しながら解き得ません、此問題に對して吾等は堅き岩に向つて吾等の頭蓋骨を突當てるの感が致します。

然しながら多くの難解の問題は其解答を與へられて、稍や解釋の緒に就くものであります、罪惡問題の哲理的說明は未だ供せられません、或は是れ永久の未決問題として存るのであるかも知れません、然しながら其實際的解釋は供せられました、是れ罪を識らざる神の獨子の十字架上の受難であります、玆處に人類の罪は打消されました、玆處に罪の犧牲は献げられました、聖なるものゝ「エリエリ、ラマサバクタニ」の聲と共に罪の赦免の途は人類のために開かれました(馬太傳廿七章四六節)、是故に(今より後)イエスキリストに在る者は罪せらるゝ事なし(羅馬書八章一節)、是れが罪惡問題の實際的解釋であります、爾うして此解釋を得て後は吾等は哲學的說明のなきのを意に介せざるに至るのであります、恰かも疾病を癒されて後に病人は藥劑の生理的作用の說明を問はざるに至るやうなものであります、是れは何にも貴下の困難い御質問に對しての私の逃げ口上ではありません、無智の人類が此難問に對して供し得る解釋としては唯此實際的解釋があるのみであります、此問題の場合に於ては私共は結果に因て原因を察するのであ

ります、神の聖子の犧牲を要する人類の罪惡の皮想的のものに非ずして、根本的なること、局部的のものにあらずして全般的なることを知るのであります。

問、貴下の御精神は能く判明りました、爾うして是れより後の事を貴下に御尋ね申しても無益であらうと思ひます、人生問題は物理問題とは違ひ、或る點まで達すれば其處に「止まれ」の號令を受けなければならないかも知れません。

答、實に爾うであります、人生問題の特徴は之を解するに方て、頭腦の明晰のみならず、亦心の健全なる狀態を要することであります、罪のこと、贖罪のこと、救濟のことは、是れは是れを解するための或る適當なる狀態にまで心を持來たさるゝにあらざれば解するとの出來るものではありません、罪に責めらるゝにあらざれば罪のことは判分りませんん、罪の抽象的解釋ほど味のないものはありません、罪の包圍攻擊を受けて、苦悶の餘り天の一方に十字架の血路を見出して、時ならぬ其救濟に與つて始めて罪のことが少し判分るのであります。

問、尙ほ一つ伺つて置きますが、何故此事を墮落と云ふて腐敗と云はないのでありますか。

答、夫れには深い理由があります、腐敗は墮落の結果でありまして、二者は同一のものではありません、腐敗した爲めに墮落したのではありません、墮落した爲めに腐敗したのであります。

問、爾うして人類は何から墮落したのであります乎。

答、神から墮落したのであります、彼が天の處（以弗所書一章三節）に於て神の側に於て神と偕に有つべき地位から墮落したのであります、彼に臨みし總ての悲痛は此墮落に原因して居るのであります、罪の中の罪とは神を捨て去ることであります、盜むことも、殺すことも、姦淫することも、之に勝さるの罪ではありません、否な、是等の罪は總て神を捨て去りし罪の結果として人の行爲に顯はれて來たものであります、隨て救濟の何んであるかゞ御判分りになりませう、救濟は先づ第一に人を神に連れ還ることであります、爾うして基督の十字架は神と人との間に立つて此獨特の用をなすものであります、基督は道德を說いて僅かに人心に改善を計り給ひませんでした、彼は罪其物を滅し給ひました、

た、即ち基督に依て神と人との間に在りし離隔は取去られました、爾うして人が再び神に還り得るに至つて罪は其根元より取去られるに至りました、墮落は清潔を以て癒さるべきものではありません、墮落を癒すものは歸順であります、父よ我れ天と爾の前に罪を犯したれば爾の子と稱ふるに足らずとの言を以て天の父の許に昇り還ることであります、爾うして此歸順を決行して後は、罪は我儕の上に再び勢力無きに至ります、基督の供し給ふ救拯は是より以下のものではありません、即ち罪の全滅より以下のものではありません、基督は人を再び神の懷に連れ還り給ひて我儕の墮落を癒し給ひます、彼を中保者又は保惠師(約翰第一書二の一)と稱し奉るのは全く是れがためであります。

* * * * * * * * * *

義人なし、一人もあるなし、

人は皆な既に罪を犯したれば神より榮を受くるに足らず、

聖書は萬人を罪の下に拘幽めたり、

是れは人類の實驗であります、其説明は如何あらうとも、我を始めとして、我が周圍の

凡の人にして、又我が知る凡ての人にして、又我が聞きし又は讀みし凡ての人にして、此暗らさ凄さ記事に當らない者とては一人もありません、然しながら此暗黑に對して此光明があります、即ち、

それ神は其生み給へる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信ずる者に亡ぶること無くして窮なき生命を受けしめんがため也(約翰傳三章十六節)。

キリストの愛我儕を勉ませり、我儕思ふに一人、衆の人に代りて死たれば衆の人、既に死たる也、その衆の人に代りて死しは生ける者をして以後、己がためならで己に代りて死して甦りし者のために世を過さしめんとて也(哥林多後書五章十四、十五節)。

是れは基督信徒の實驗であります、其説明は如何であるとも、是れパウロ、ペテロ、ヨハネを始めとして、アウガスチン、アムブロース、ベルナードを經て、ルーテル、ウエスレー、グラッドストンに至るまで、凡てキリストの十字架の血に其罪を洗はれし者の確さ深さ實驗であります、私は今日の貴下の御質問に對して私の解答の殊に不完全なるを感じます、然しながら基督教に關する多くの疑問は是れは地に在ては説明することの

出來るものではありません、是れはパウロと偕に第三の天の高さにまで尋ね行かれて、其處に內心の眼を開かれて直に神に示されて會得し得るものであります、其默示の大部分は言ふべからざる言即ち人の語るまじき言であります（哥林多後書十二章一－四節）、私の答辯の少しく謎的なるは全く是れがためであります。

問、承知致しました、ナマジカの哲理的御說明よりも其正直なる御表白と御感話とが返て私の眼を開くに足ります。

答、爾う御受け取り下されば誠に有難う厶ります、餘は又他日申上げることに致しませう。サヨナラ

視よ、我れ邪曲の中に生れ、罪にありて我が母我を妊みたりき……爾、ヒソプをもて我を潔め給へ、然らば我れ潔まらん、我を洗ひ給へ、然らば我れ雪よりも白からん（詩篇五十一篇五、七節）。

第八席　奇跡の信仰

奇跡なくして宗教あるなし、奇跡の否定は宗教の否定に終る、然らば何をか奇跡と云ふ、其外形に於ては「奇しぎなる事」なり、然れども其內容は靈の活動なり、靈其物が奇跡の最も大なるものなり、故に奇跡は無私の人のみ能く之を行ふを得べし、基督の奇跡は總て愛の發顯なりし、神を信じて天然は總て奇跡的に解釋せらるゝに至る、而かも科學は是れが爲めに其硏究の精神を失はず、否な、天然を奇跡的に解釋してのみ科學に眞正の興味生ず、奇跡の信仰は無益の信仰に非ず、此信仰ありて世に懼るべきもの全く無きに至る。

問、私は貴下が奇跡を信ぜらるゝことは豫ねて承知して居ります故に、今日は奇跡は何んである乎、貴下が之を信ぜらるゝの理由、之を信ずるも近世科學と衝突することなき乎、

其等の點に就て貴下に伺いたく欲ひます。

答、承知致しました、私は實に奇跡を信じます、奇跡を信ぜずして基督教は信ぜられません、否な、奇跡を信ぜずして如何なる宗教も信ぜられません、私は未だ世に奇跡の無い宗教のあるのを知りません、然るに今の人は奇跡を信ずるの困難なるよりして、或は理學宗とか、或は倫理宗とか稱へて奇跡の無い宗教を造らんと致しまするが、然し斯かるものが宗教の用をなさいことは誰でも知つて居ります、私の考へまするに奇跡を排斥しまするならば其れと同時に宗教を排斥すべきであると思ひます、奇跡を否定しながら宗教の必要を說くのは、飲食の不要を唱へながら健康の幸福を說くの類であると思ひます、奇跡は宗教の滋養であります、此養汁ありてこそ、宗教なる生物は存在し且つ繁殖するのであります、奇跡を取除いて御覽なさい、宗教といふ宗教は皆な死んで仕舞ひます。

問、私も爾う思ひます、私は奇跡を嘲つて得々たる今日の宗教家なる者を信じません、然し困難なるは今の時に方て奇跡を信ずることであります、私も人生に取り宗教の必要、缺くべからざるものであることを信ずる者の一人であります、然るに奇跡を信ずるの困

難なるよりして今日まで宗教を信ぜんと欲して信ぜざりし次第であります、若し少しにても奇跡に關する私の疑念が晴れまするならば、私は夫れ丈け宗教に近づいて來るのであります。

答、御困難の程は充分に御察し申します、私も此問題に就ては十數年間の苦惱を經た者であります、宗教を棄つる能はず、然りとて奇跡を信ずる能はずとは近世人士の特別の困難であると思ひます、往昔の人には此困難はありませんでした、若し有つても私共のそれに比べて見ますれば至て僅少でありました、實に奇跡を信ずると言ふのは容易くありません、然し之を科學の原理と共に信ずるのは非常に困難い事であります、私は愛なる神は私共の感ずる此非常の困難を認め給ひまして、私共が容易に奇跡を信じないとて殊更らに私共に就て怒り給はないと信じます。

問、其御同情は誠に有難く感じます、然らば伺ひますが、奇跡とは抑々何であります乎。

答、左樣であります、先づ其問題から定めて行かなければなりません、之を奇跡と云ひ靈跡と云ひ、異跡又は神跡などゝ云ひまするのは、皆な奇跡の外形を云ふたのであります、

即ち尋常ならざる事跡、眼を驚かし魂を奪ふ底の事跡、天然の法則を稱へて人類が日常目擊しつゝある事物の順序を外づれたる事跡、是れが奇跡であります、爾うして斯かることは通常、有るべきことでなく、又若し有るとしても、其事實を糺すの非常に困難なるより是を信ずることが非常に困難なるのであります、私は少しく逆説に走りますが奇跡を奇跡と書きまする故に、之を信ずるのが非常に困難なるのであると思ひます、即ち人が奇跡の外形にのみ眼を留めて其内容に注意しません故に、容易に之を信じないのであると思ひます。

問、奇跡の内容とは何んであります乎。

答、奇跡の内容とは靈の活動であります、若し靈なるものゝ實在を認めますならば、奇跡は厭でも信じなければならなくなります、靈其物が天然以上のものであります、又若し靈も天然の一部分であると曰ふ人がありまするならば、然らば奇跡も亦天然的顯象の一種でありまして、之に就て何の疑を挾むの必要もなくなります、然かし吾人が通常天然と稱するものは靈以下のものであります、爾うして天然以外に靈が有ると致しますれば、

奇跡は既に有るのでありまして、其活動が奇異なる事跡となりて現はれ、時に人目を驚かしますることは決して怪しむに足りません。

問、尚ほ其事に就て更らに精しく御説明を願ひます。

答、勿論、此事は哲學上の大問題であります、自由意志を有する靈なるものありや、否や、此問題を充分に討究せんとすれば、スピノザ、ライプニッツ、カント、ヘーゲル、ショッペンハウエル、其他の大哲學者を悉く呼び來らなければなりません、然しながら是れ必しも大哲學者の判斷を俟たなければ解決の出來ない問題ではないと思ひます、自由意志とは自由意志であります、即ち外界何物の束縛をも受けずして、其上に超然たるものであります、人はパンのみを以て生くる者ではない、正義、眞理、神、愛、是れは全世界よりも尊いものである、人が身を處するに方て、彼は風の方向や世の潮流に眼を注いではならない、靈には靈界の法則があつて、人は此「自由の律法」に循てのみ鞠かるゝ者であると、是れが自由の精神であります、自由意志を哲學的にドウ説明しませうとも、自由とは斯かるものであります、爾うして自由のある所には奇跡を行し得るの力があります

す、人が人たるの特權を揮ふ時に彼は奇跡の可能力を疑ひません、彼が神の子たることを忘れて、單に天然の子であるとのみ思ふ時に、彼は奇跡の有無に就て彼の心思を非常に惱ますのであります。

問、其事は判分りました、然かし若し靈の活動が奇跡の內容でありますならば何故に奇跡がモット普通に行はれません乎、人、彼自身が奇跡であるとならば彼の居る所には奇跡は必ず行はるべきではありません乎。

答、左樣であります、或る意味から云へば人の在る所には必ず奇跡が行はれてあります、然かし其事は今爰では申上げません、私は貴下の稱はる〻奇跡、即ち聖書に記いてあるやうな奇跡、其れが何故、普通に行はれない乎、其事に就て申上げませう。

爾うして其理由は探るに難くありません、或る時、弟子がキリストに向ひ、何故、彼等も其師の如くに奇跡を行ふ事が出來ない乎と聞きました時に、キリストは斯う答へられました、

爾曹信なきが故なり、我まことに爾曹に告げん、若し芥種の如き信あらば此山に此處より彼處に移れと命ふとも必ず移らん、亦、爾曹に能はざること無るべし（馬太傳十七章廿節）。

信とは此場合に於ては靈の能力であります、是れは人が萬物の靈長として神より授かるの特權を與へられたものでありまして、此能力を以てして彼が天然界の上に施さんと欲して施し得ざることはないとのことであります、然るに人類は神を離ると同時に此能力を失つたのであります、彼は今は天然の奴隷となりまして、斯かる能力の彼の掌握の中にあることを聞きましても、之を荒唐無稽と稱して全然排斥するに至りました、彼は今は天然を支配する者ではなくして其束縛の中に苦む者であります、然かし斯かる境遇は彼が自から作つたものでありまして、彼は素々斯かる奴隷であるべき筈の者ではありません、爾うしてキリストの降世の一つの大なる目的は人類に此最初の特權を再び附與せんがためであります、即ちキリスト御自身が常に天然の上に超越して其束縛を受けられなかつたやうに、我儕彼を信じ彼を愛する者にも亦此同じ能力（世人をして言はしむれば、奇跡力）を與へんがためであります、人間とは斯くも貴い者であります、彼は五尺の身體の

中に近頃發見になりましたテヂユムも及ばない程の怪力を供へた者であります、キリストが人類に就て信ぜられたことは我儕人類の想像以外であります。

問、奇跡の内容は御説の通りであると致しましても、其外形は矢張り奇跡即ち「奇なる事」であります、爾うして若し夫れが信ずべき事實であると致しますならば世に事實として信じ難い事は全く無きに至るではありまん乎。

答、其れは爾うではありません、物に眞僞のあるのは御承知の通りであります、眞正の愛國心があります、虚僞の愛國心があります、國の利益を計ると云ふて、其事が總て愛國心であるとは限りません、奇跡も亦其通りであります、眞正の奇跡があります、虚僞の奇跡があります、其外形が奇跡であればとて、其れは名のみの奇跡でありまして、私共キリスト信徒が稱ふ奇跡ではありません。

問、然らば如何して奇跡の眞僞を判分つことが出來ます乎。

答、其精神に入つてゞあります、恰度愛國心の眞僞を判分つと同じとであります、名譽利達を目的とする愛國心は縱令、身を君國のために殺しましても、其れは實は虚僞の愛國心

であります、眞正の愛國心に自己てふ觀念は全く無い筈であります、己れ國賊の名を蒙りて死すとも國のために盡さんとするのが眞正の愛國心であります、其通りに奇なる事を爲すとが必しも我儕の稱する奇跡ではありません、パロの魔術師はモーゼに劣らぬ奇跡を演じました、然し其奇異なる業なるが故に我儕は之を奇跡とは稱しません（出埃及記第七章以下參考）、眞正の奇跡には眞正の愛國心に於けるが如く「自己れ」てふ觀念は全く有りません、爾うして私共キリスト信徒が信ずる奇跡は「愛の休徴」なる奇跡であります。

問、然らば貴下は奇跡は神か、又は神に潔められた者に非ざれば行ひ得ない事であると仰せられるのであります乎。

答、爾うであります、世人の奇跡に關する思考は此點に於て大に誤ります、彼等は奇跡は若し行へるものであるならば誰にも行へるものであると思ひます、然かし其れは決して爾うではありません、奇跡は無私無慾の自己のためには何の求むる所なき人に非ざれば決して行へるものではありません、是れは前にも申上げました通り、靈の能力の發顯であ

りまして斯かる能力は若し與へられるものであると致しますれば、斯かる人にのみ與へられるものであります、利慾一方の相場師が如何に望むとも一獲千金の利を貪らんために一つの奇跡をも行ふことは出來ません、又、縱令、宗教家たりと雖も、自己の勢力の扶植を謀り、自己の教會の擴張を欲して、此能力の微塵だも得ることは出來ません、奇跡を行ふの能力は是れは献身犧牲、自己を忘れて神の榮と人の善とを計らんとする者にのみ與へられるものであります、奇跡は愛と之れに伴ふ威權との休徴であります、世に愛に優るの權能はありません、爾うして其實に宇宙をも動かすの能力あることを示さんために、神は愛を以て充滿する人に特に此能力を賜ふのであります。

問、然らば貴下は聖書に記るしてある、キリスト幷に使徒等に由て行されたる奇跡は皆な貴下の仰せらるゝ愛に伴ふたる奇跡であると仰せられるのであります乎。

答、勿論です、善くキリストの行された奇跡に就て考へて御覽なさい、其中に自己のために爲された奇跡とでは一つもありません、彼は醫者の目を開かれました、跛者の足を立たせられました、一時に四千、又は五千の人を養はれました、然かしながら曾て自己の飢

餓を癒さんが爲に一回の奇跡だも施されませんでした、彼の敵は彼を十字架の上に上げて彼を嘲りて曰ひました、人を救ひて自己を救ふ能はず（馬可傳十五の卅一）と、キリストは實に人を救ふためには奇跡を行ひ得ましたが、自己を救ふためには之を行ひ得ませんでした、自己を殺さんがために來りし敵の傷は奇跡を以て直に之を癒すことが出來ましたが、然かし自己の脇より流れ出づる血潮を留めることは出來ませんでした、人を援けるための異能を具備へしイエスキリストは自己を救ふためには全然無能でありました、弱者を救はんがためには風をも叱咤して之を止め給ひし彼は自己の敵の前に立ては之に抗せんとて小指一本をさへも擧げ給ひませんでした、キリストの奇跡よりも更らに數層倍奇ぎなるものはキリストの無私の心であります、然しながらこの奇ぎなる心があつてこそ、始めて彼の奇しぎなる業が行はれたのであります、業は心の發顯て外ありません、然るに世の人は外形の業にのみ眼を留めて、其、之を發せし心に念ひ及びません。

問、キリストの奇跡の精神は御説明て善く判分りました、然らば若し其精神が有れば何人にも奇跡が行はれると仰せられるのであります乎。

答、爾うであります、然かし茲に注意すべきことは、奇跡を行はんと欲する、其心の既にキリストの心でないことであります、キリストは彼が奇跡を行ひ得たればとて、其れが故に聖なる者であるとは自覺せられませんでした、否な、之に反して、キリストは人が彼の奇跡以外に於て彼の神子たることを認めんことを欲せられました、キリストが奇跡を行はれましたのは恰度名醫が劇藥を用ひまするやうに、止むを得ざる場合に於てのみ之を行はれたのであります、爾うして之を行ひ給ひし後には其決して持むべきものでなきことを示し、亦廣く之を世に吹聽して、世人の好奇心を喚起さゞるやうに深く注意せられました、ヘロデ王がイエスを見るや、直に其奇異なる業を見んと望みしやうに（路可傳廿三の八）世人がイエスに就て第一に知らんと欲するとは其奇跡如何であります、然しイエスは不信のヘロデに奇跡を示し給はざりしやうに不信の世人にも之を示し給ひませんでした、奇跡を望む者は之を行ふことも出來ず、見ることも出來ず、又、見ても其神の奇跡なることを信ずることも出來ません、奇跡のための信仰ではありません、信仰の結果たる奇跡であります、奇跡を目的の信仰は信仰でありません故に、其れが奇跡を行ひ

得ないのは勿論であります。

然しながら、其れは其れとして、無私の信仰が奇異なる業を爲し得ることは疑を納れません、「爾曹の信仰に循ひて」とはキリストの約束でありまして、我儕の爲し得る事業の大小は我儕の有ち得る信仰の厚薄に由るとは聖書の明白に示す所であります、爾うして我儕の信仰にして若しパウロ、ペテロのそれに等しきものであるならば、何故に我儕も彼等に劣らざる事を行し得ない乎、私にはどうしても分りません。

問、然らば若し貴下にペテロの信仰があれば貴下もペテロのやうに「ナザレのイエスキリストの名により起て行め」との一聲を以て跛者を其足の上に起たしむることが出來る御信じになるのであります乎。

答、稀態なる御質問であります、然し單に奇を好まるゝ心より出た御質問ではないと信じましてお答へ申しませう、左樣であります、其場合には私にもペテロ丈けの事業が出來やうと思ひます、然かし之れを成就るの方法に至ては二十世紀に生れし私が一世紀に存在せしペテロに倣ふや否やは全く別問題であります、跛者を癒すの法、必しも大喝一聲

を以てするに止まりません、神は時代に循ひ種々の方法を以て病者を痊し給ひます、爾うして私にもペテロの場合に於けるが如く、私が或る跛者を痊すに由て神の榮光が非常に顯はれ、夫れが爲に全世界がキリストの救濟の能力を認むるに至りまするやうな場合が起りまするならば、私にも何にかの方法を以て此病者を痊すの能力が與へられやうと思ひます、或は近頃此種の病者を痊すを以て有名なる墺國の某醫師が有つやうな秘訣が私にも示さるゝかも知れません、或は或る神經作用に依て、ペテロの奇跡にも優るの奇跡が私に由て行はるゝかも知れません、然かしながら私は斯かる假定を設くるの何の必要がある乎、其事を解しませんと同時に、又斯かる推測を以て之に應じまする私も僭妄の譏を免れまいと思ひます。

問、御注意の段は承知致しました、然し私の特に伺ひたいのは若し貴下の御説明にして間違なくば、天然と奇跡との區別が全く消えて仕舞ひまして、何にが天然であつて、何にが奇跡であるか、全く判分らなくなるではあるまい乎と思ひます、若し醫術に由るも奇跡であると致しますれば夫れで奇跡問題は消滅して仕舞ふではありません乎。

答、興味ある御質問であります、實に天然と奇跡とは其外形に於ては少しも違ひませんと思ひます、曾て博士ハクスレーが曰ひました通り、奇跡が若し有りとしますれば是れ亦天然的現象として攻究すべきものでありませう、天然を透うして現はれる奇跡は天然的現象として現はれる外はありません、ベサイダの野に於て魚とパンとを以てキリストに奇跡的に養はれし五千の男女は、そのパンと魚との由來に就ては何の知る所もなかつたらうふと私は思ひます、彼等は唯、パンと魚とが何等かの方法を以て彼等の前に置かれしのを見ました、然れども如何にして一尾の魚が五千尾となりし乎、其秘密に就ては吾人近世の動物學者が、如何にして一尾の鱈魚が四百万粒の卵子を生み得るか其秘密を知らざるが如くに、彼等は之を知らなかつたらうふと思ひます、唯其奇跡なりし事は是れを行ひしイエスと彼を信ぜし彼の弟子のみが知つて居りました、今若しキリストが世に現はれ給ひまして、死者を甦らせ給ふと致しますれば、之を目擊せし醫學者等は其奇跡なるとは認めずして、直に其天然的理由の發見に着手するに相違ありません、即ち神を信ぜざる者の眼には奇跡なるものはありません、若し又有るとするも彼は其奇跡なることを識り

得ません、奇跡は矢張り天然的現象として現はれるものでありますから、之を識別するためには信仰の眼を要します、何が奇跡であつて、何が奇跡でない乎、是れは眞正の信者のみが見分くることの出來ることであります。

問、爾う仰せられますれば止むを得ませんが、然かし若し信仰の眼を以て見ますれば凡の事が奇跡として見ゆるに至りませんか乎。

答、爾うであります、奇跡とは神の能力の發顯でありますから、神の存在と活動とを信ずる者の眼には奇跡天然の別はありません、彼に取りては實に天然と稱して、神より全く離れ、惟り活動いて惟り生ずる者はないのであります、彼には唯二種の奇跡があるのみであります、尋常的奇跡、是れが天然であります、非常的奇跡、是れが聖書に示してあるやうな奇跡であります、今日まで萬物を天然的に解し來りし彼は今は意志的に、即ち奇跡的に之を解するに至りました、彼の宇宙觀は神を信ずるに由りて一變致しました。

問、多分爾うであらうと思ひます、然かし其結果として萬事萬物は氣儘なる意志の遂行と化し、天然に法則と順序とは絶えて科學は其研究の精神を失ひ、又、人は勞働の無用を

感じて、たゞ密室に籠つて偏に祈禱に由てのみ神の援助に與からんと欲するには至りませんか。

答、其御心配は全く御無用であります、神を信じて天然は決して渾沌とは化りません、隨て科學は其研究の精神を失ひません、否な、神を信ずるに由て、科學の精神が始めて起るのであると思ひます、科學の精神は天然の統御並に征服にあります、爾うして天然を懼れ、其奴隷と成りし者に此精神の起りやう筈はありません、人は先づ天然の主人公とならなくてはなりません、爾うして彼が神を信ずるに由てのみ此權能は彼に賦與せらるゝのであります、靈が物に勝つまでは物の科學的研究は始まりません、爾うして宗教は人に靈の自由を供し、彼に天然に打勝ち、之を治めんとするの意志を起します、科學研究第一の要素は此自由の意志であることは深く之に從事した者の誰でも認むる所であります。

而已ならず、神の意志とは氣儘なる意志ではありません、意志とは氣儘なるものなりとは之を不完全なる人に於てのみ見た者の言ふことであります、世に信頼すべきものにし

て、義者の意志の如きはありません、天然は其期節を誤りて五穀實らず、民、爲めに飢餓に泣くことが有りましても、義者は決して其約束を違へません、泰山は崩れて海と成りましても、義者は決して其志を曲げません、變り易きものは意志ではありません、病める意志であります、健全なる意志は天然の成行よりも信頼するに足る者であります。人の意志でさへも爾うでありますものを、神の意志は尚更らのことであります、世に恆久不易のものにして神の意志の如きはありません、天と地とは廢らん、然れど我言は廢らじとは神の聲であります（馬太傳廿四の卅五）、若し神の意志が變幻恆なき者でありまするならば、世に信頼なる者は全く迹を絶つに至ります、神を信ずるとは恆久を信ずることであります、爾うして天然は神の此恆久性の一面を現はすものであります故に、我儕は非常の興味を以て之を研究するのであります、恆久と稱ふても勿論神の如く恆久なるのではありません、山の恆久なるも勿論神の恆久なるには及びません、然しながら人事の菫花一朝の榮の如くなるに較べて山嶽の千秋に其姿を變へざるを見て、我儕は神を我儕の「磐」と稱んで彼の恆久を讃へまつるのであります、天然を神の意志の發顯と

見て、我儕は始めて天然の眞相を悟り、隨て虔んで之を研究せんと欲するの念が我儕の心に起るのであると思ひます、然かし意志である以上は神の意志であるにもせよ之は永久不易の規則ではありません、爾うして規則でない以上は、時に其變更せらるゝのは決して怪むに足りません、天然の法則を規則と解して、天然は我を縛る桎梏となります、然かしながら愛の神の意志の發顯であります以上は是は虔んで服從すべきものであります して、强ひられて其束縛を受くべきものではありません、神を信ずると同時に天然が我儕の敵たるを歇めて、我儕の友、又はホームたるに至りまするのは全く是れがためであります。

意志は其中に愛を含みます、夫れ故に神の意志の發顯たる天然は亦神の愛の發顯として我儕の眼に現はれます、爾うして愛は熱心の唯一の發動者でありますから、天然に神の意志を認めて我儕は熱心を以て之に對し、愛を以て其奥義を究めんと致します、キリスト信者の天然の研究なるものは不信者のそれとは全く違ひ、彼は面白半分に之に從事するのではありません、我儕の父の造りし庭園に其奇石珍草を探ぐるの心を以て嬉しく之

に從事するのであります、天然を奇跡と解して天然の研究は厭むと云ふ人は未だ之を爾う解したことのない人であると思ひます、驚嘆は確かに科學研究のための一大刺激であります、爾うして信仰は天然の研究に此健全なる刺激を供するものであります。

奇跡を信じて私共が勞働を廢めるに至るであらふとの御心配も亦據る所なき無益の御心配であります、我儕は萬物を奇跡的に解してのみ始めて勞働の何たる乎が解かるのであります、勞働は飢寒を怖れて止むを得ず厭々ながら我儕が從事すべき筈のものではありません、勞働とは其眞正の意味に於ては、神と偕に働らくことであります、或は神をして我に在て働らかしむることであります、我が父は今に至るまで働き給ふ、我もまた働くなり（約翰傳五の十七）とのキリストの言葉は能く勞働の眞意を盡した者であります、我が裏に存る僅少ばかりの力に由て我が職務を盡さんとすればこそ、私共は非常に勞働の苦痛を感ずるのであります、然しながら神は我が要する能力は總て之を我に下し給ふと信じて私共は能力の不足を全く感ぜざるに至り、隨て勞働の苦痛なるものは私共の念頭より全く迹を絶つに至るのであります、神の奇跡を信ぜざる勞働者の生涯は此點より考へて見て實に氣の毒なるものであります、私共は勞働者を助けんと欲して、彼の賃銀の增加を求ひ、彼の勞働時間の減少を計るのみでは足りません、彼に奇跡の神を紹介し、彼をして上より新たなる能力の供給を受け、走れども疲れず、歩めども倦まざる者たらしむるのも亦、彼を慈むの一つの方法であると思ひます、奇跡の神が在せばとて、唯口を開いて呆然として神の自己を養はんことを待つ者の如きは未だ眞の神を發見したことのない者であります。

困窮は發明の母であると云ひまするが、然し眞正の發明の母は困窮ではなくして感謝の心であります、人類が危急に迫りて已むを得ず絞り出す智慧は以て到底、宇宙の深奥に達し、其處に其秘密を探出すに足るの智慧ではありません、大なる發明は神の恩惠を悅び、天然と和して造主の指導の下に其寶庫の中に入て、欣然、其解鑰を得て、探り得た發明であります、天然を大なる謎と解し、奇才を以て其秘訣を竊出すのを以て發明とは稱へられません、天然を奇跡と見るならば學術上の發明が止むであらふとの心配も全然杞憂に過ぎません。

問、種々の御説明に依て奇跡の哲理は大分判分りました、然かしながら之を信じたればとて何の實益があります乎、奇跡を信ぜずして宗教は信じられますまい、然しながら貴下とても往昔の聖人の奇跡を其儘繰返さんと御欲召さるゝのではありませんから、其れを信じになりたればとて夫れて貴下の御生涯に何にも直接の實益があらふと仰せられるのではありますまいと思ひます、如何です乎。

答、奇跡信仰の實益、是れは近頃珍らしい御質問であります、然し全く益のない御質問ではありますまい、信仰が信仰でありまする以上は、現生涯に全く關係のない信仰とては無い筈であります、爾うして若し奇跡が眞に有ると致しますれば、之を信じて私共の生涯に何にかの利益が無いとも限りません、私は未だ曾て宗教上の信仰なる者を一の氣休藥として解釋したとはありません、信仰は人の主義確信でありまして彼の生命の眞髓であります、奇跡の信仰も亦斯かる重要の地位を保つものであります。

奇跡を信仰して私共は大膽に大事に當ることが出來ます、之に由て私共は自己の能力を計らず、若し正義であり、大道であると信じますれば、憶せず懼れず、其の實行を

以て自から任ずることが出來ます、奇跡の神を信じて不可能事は私共の念頭に全くなくなります、私共は先づ神意の在るところを探ぐればそれで問題は盡きるのであります、後は能力の問題であります、爾うして能力は私共は之れを奇跡の神に仰ぎます、斯く申上げて貴下は私の無謀を御笑ひになりませうが、然し世界の大なる偉人とは皆な此の一種の「迷信」を有つた者であります、ルーテルでも、コロムウエルでも、ウエスレーでも皆な自己の能力を計つて彼等の眼前に横はりし大事に當つた者ではありません、彼等は皆な「神、若し我と偕に在らば我れ何をか爲し得ざらんや」との奇跡の信仰を以て彼等の大任を擔ふた者であります、奇跡を信ぜざる者は此の世に在て憶病者たらざるを得ません、斯かる人は先づ自己に省み、周圍に鑑み、時勢を計りて然る後に動く者でありますから注意深くあるやうで實は何にも大なる事は之れを爲し得ない者であります、勿論奇跡を信ずることに大なる危險があります、奇跡を信ぜずして、十字架に懸けらるゝの心配はありません、然しながらカーライルの申しますやうな「火の車に駕して天に昇るの生涯」は奇跡を信ぜざるものの遂ぐることの出來る生涯ではありません、又、奇跡

を信じまして私共に永久の忍耐が生じます、我が裏を省みますれば實に軟弱汚穢、取るに足らざる者ではありますが、然かし上を見ますれば昴宿參宿をさへ自己の掌の中に自由に動かし給ふ神が在ると信じまする故に、私共は此神を仰ぎ瞻て自己を潔め且つ强め、以て如何なる難事業にも當ることが出來ます、かの世に多く存在する、他人の缺點を摘指するの外、自己の可能力を自覺し能はざる批評家と稱する人士の如きは、皆な此信仰を有たない者であると思ひます、無限の能力の所在を知り、亦之を獲るの途を知る者は他人の缺點を發見して、自己に滿足を買ふの必要はありません、斯かる人は直に大能力に至り、其處に新たなる能力を得て自己の缺を補ふと同時に、亦他人の缺までを補ひ呉れんと欲するの慈悲心を起します、實に奇跡の信仰は私共を積極的の人物と作します、私共は能力の不足を感する痩犬の如き不平家たるを歇めて、糧食足りて膏油滴るばかりの肥馬の如き者となりまして、險に際して躍り、難に遭ふて勇む者となります。其れのみではありません、奇跡の信仰は私共をして希望の人たらしめます、死に勝つの希望は奇跡の信仰に由ります、天に昇るの希望も亦奇跡の信仰に由ります、奇跡の信仰

なくして墓の彼方は眞暗であります、又奇跡の信仰なくして世界の未來も眞暗であります、若し數字を列べて人類の將來を考へますれば私共はマルタスの人口論の結論に達するより外はありません、然しながら人の靈の自由を信じ、靈に由て顯はるゝ神の異能を信じまして、私共は此地の將來に就て少しも疑懼を懷かざるに至ります、私共は只天國と其義とを求むれば足ります、其他の事は神が何にかの方法を以て私共に加へらるゝと私共は堅く信じます。

奇跡の信仰なくして高潔なる詩歌も美術もありません、奇跡の信仰なくして人は皆な算術一方の商人と化ります、人の人たる所以は彼に天然に凌駕するの能力があるからであります、或る詩人の言ひました通り

人にして若し人以上たり得ずば、
人とは如何に憐むべき者なるぞ。

と、我が財嚢の底にある金と、我が筋骨に在る力とが我が所有の總てゞあるならば、我は如何に憐むべき者ぞと、何人も喊ばざるを得ません、私は貴下が奇跡の信仰を以て僅

貴番品であるやうに見做れざらんことを望みます。サヨナラ、

信仰に由りて七日の間ヱリコの城を環巡りたるに遂に其石垣崩れたり、信仰に由りて妓婦のラハブは信ぜざる者と共に亡びざりき、……我れ更らに何を言はんや、若しギデオン、バラク、又サムソン、イヒタ、ダビデ又サムエル及び預言者輩の事を言はんには時足らざるなり、彼等信仰に由りて諸國を服し、義を行ひ、約束の者を獲、獅の口を箝み、火の勢を滅し、劍の刃を避れ、往弱より出て剛強せられ、戰爭に於て勇しく、異邦人の陣を退かせたり、婦人も亦死たる者の復活を受けしとあり、亦或る人は最も愈れる復生を得べきため酷刑られて免さるゝことを欲まざりき、(希伯來書十一章自三十至三十五節)。

基督教問答終

明治三十八年二月十四日印刷
明治三十八年二月十七日發行

定價金參拾錢

著者　東京府豐多摩郡淀橋町大字角筈百一番地　内村鑑三

發行兼印刷人　内村シヅ

發行所　聖書研究社

印刷所　東京市牛込市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

不許複製

主幹　内村鑑三

聖書之研究

高潔なる宗教雜誌也、

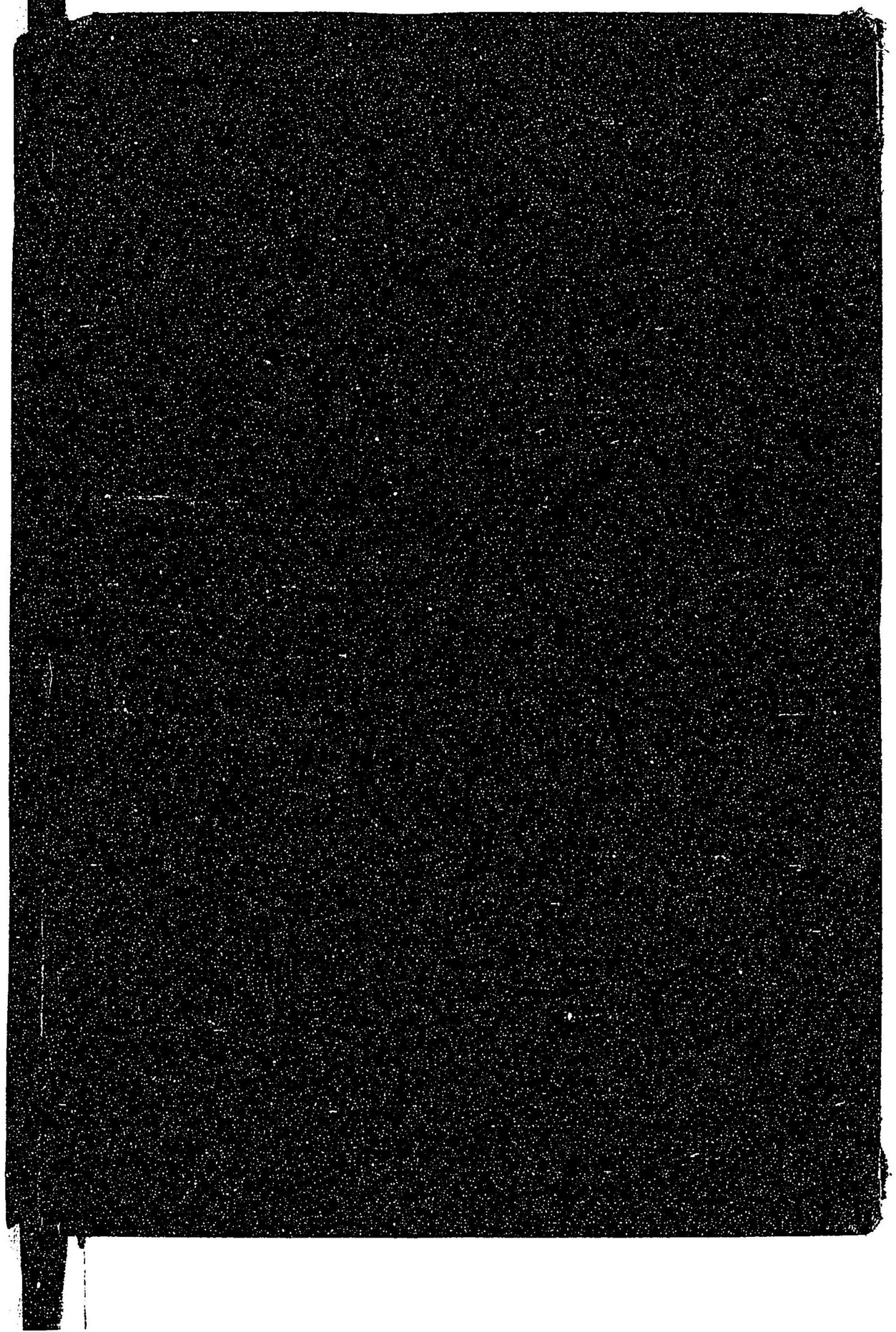
毎月一回二十日發行

世道人心を感化せし書にして基督教の聖書の右に出る書の全世界にあるなし、近世文明は其總ての方面に於て此書の感化を受け、此書を知らずして世界文物の精神に入ること能はず、本誌は此の『世界の書』を我邦人に紹介せんために發行せらるゝ我國唯一の雜誌也、今や多くの最も誠實なる讀者を全國到る所に有し、最も高潔なる宗教雜誌として天下に目せらる。

初號より六十一冊既刊（明治三十八年二月まで）、毎冊宗教的智識の寶庫たり、一冊に付き賣價金拾錢、十二冊（一ヶ年分）金壹圓拾錢、凡て前金の事、郵送料總て當方持、郵券十錢を送れば見本一部を呈す

發行所　東京新宿角筈百一　聖書研究社

95
31



95
31

020517-000-4

95-31

基督教問答

内村　鑑三／述

M38
ABI-0330